

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Paternal involvement in infant care and developmental milestone outcomes at age 3 years: the Japan Environment and Children's Study (JECS)

和文タイトル:

乳児期における父親の育児への関わりと子どもが3歳時点の発達との関連: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 京都ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名: 同志社大学赤ちゃん学研究センター

発表雑誌名: Pediatric Research

2023年: DOI: 10.1038/s41390-023-02723-x

筆頭著者名: 加藤 承彦

所属 UC 名: 京都ユニットセンター

目的:

近年、父親の育児への関わりに社会の関心が高まっているが、父親の関わりが子どもにどのような影響を与えるのかあまり明確ではない。先行研究では、事故の予防や第二子や第三子の出生などに対して良い影響があるとの知見が示されている。本研究では、父親の積極的な育児への関わりと子どもの発達との関連を分析した。

方法:

子どもが6ヶ月時点での父親の育児への関わりについて、母親による質問票の回答に基づき情報を得た。子どもの発達については、ASQ 質問票により3歳時点での5領域(コミュニケーション、粗大運動、微細運動、問題解決、個人・社会)の発達を評価した。分析は、第一子で先天性疾患などがない二人親家庭に限定し、Log-binomial モデル分析を用いた、子どもの性別、世帯所得などを交絡因子として調整した。また、子どもが1歳半時点での母親の育児ストレス(PSI)を媒介要因として考慮した。

結果:

交絡因子で調整した結果、父親の育児への関わりが多い群では、少ない群と比較して、粗大運動、微細運動、問題解決、個人・社会領域で子どもの発達遅延のリスクが低いことが観察された。また、これらの関連は、母親の育児ストレスによって一部媒介されることが観察された。

考察(研究の限界を含める):

父親の育児への関わりが少ない群と比較して、多い群では、子どもの発達遅延のリスクが低かった。両親が育児に積極的に関わることで、子育ての質が向上し、結果、子どもの発達に良い影響を及ぼしている可能性が考えられる。また、父親が育児に関わることで、日本のほとんどの家庭で主たる養育者である母親の育児ストレスを軽減し、結果、子どもの発達が促進されるという可能性も示唆された。本研究の限界として、父親の労働時間などの潜在的な交絡因子は情報が限られているため考慮することができなかった。本研究では、兄弟姉妹の人数や特徴が、父親の関わりや発達の結果に影響を与える可能性があるため、第一子に限定して分析を行った。

結論:

近年、日本では父親の育児への関わりに対する社会的関心が高まっており、父親の育児への関わりを促進する施策が展開されている。父親の育児への関わりについて更なる研究が必要であるが、今回の結果は、父親の積極的な育児への関わりが子どもに良い影響を及ぼす可能性を示唆した。